

# 川端康成「日向」論

## ——事実と虚構のあいだ

野 中 潤

### 一、なぜ海辺の宿で会ったのか

川端康成が『文藝春秋』（一九二三年十一月）に発表した「日向」は、原稿用紙にして四枚ほどの掌編小説、いわゆる「掌の小説」である。さまざまな手法を使って川端康成が生涯に書き残した「掌の小説」は百数十編あるが、きわめて短く切りつめた表現の中に、繊細な心理の綾がかいま見え、描写のあいだに隠されたものを読み取りたいという誘惑を感じさせるものが多い。

二十四の秋、私はある娘と海辺の宿で会った。恋の初めであった。

娘が突然、首を真直ぐにしたまま袂を持ち上げて、顔を隠した。また自分は悪い癖を出していたんだなど、私はそれを見て気がついた。照れてしまって苦しい顔をした。

「やっぱり顔を見るかね。」

「ええ。——でも、そんなでもありませんわ。」

娘の声が柔らかで、言うことが可笑しかったので、私は少し助かった。

「悪いかね。」

「いいえ。いいにはいいんですけど——。いいですわ。」

娘は袂を下ろして私の視線を受けようとすると軽い努力の現れた表情をした。私は眼をそむけて海を見ていた。

書き出しのわずかな描写の中にも、「私」と「娘」の心理の綾が映し出されているようで、読む者を誘惑する間合いの取り方が絶妙である。「二十四」という年齢と「恋の初め」という枠組を提示した上で、「首を真直ぐにしたまま袂を持ち上げて、顔を隠した」娘が、「袂を下ろして私の視線を受けようとする軽い努力の現れた表情」をする様子を描写することで、恋が成就するであろうことを浮き彫りにしているあたりに、そうした語り口の妙は見事にあ

らわれている。正座して背筋をまつすぐに伸ばしたまま袂を持ち上げた娘は、いったい袂をどこまで持ち上げたのかという具体的な映像を想像するだけでも、娘の人柄が彷彿とする感がある。読者によつて解釈に幅が生まれる部分だが、袂を持ち上げて顔を隠した娘は、目だけは隠さず、「私」を見つめていたに違いない。「娘は袂を下ろして」という描写の前に会話がはさまれていることで、顔を隠すという動作をしながらも眼差しをかわすことは忌避しないという娘の矛盾した反応が描出され、コケティッシュな風情が匂い立つように感じ取れる。もちろん袂で顔をすべてを隠してしまったと考えてもよいわけだが、行間をしつらえることによつて、そのあたりの所作と心理の関係について読者を解釈へと誘惑する効果を生み出していると言えるだろう。この二人はいったいどうして「海辺の宿」で会うことになったのか、ということについても、同じように解釈を誘う空白が用意されている。そもそも「私」と娘は、いったいどのような関係なのだろうか。また、なぜ海辺の宿で「会った」のだろうか。この問題を解決するために、さしあたり伝記的な問題を持ち出すことを回避して、小説の描写に出来る限り寄り添いながら解釈の落としどころを探ってみよう。

注目したいのは、この日の出来事を後から意味づけた冒頭の「恋の初めであった。」という叙述と、結末近くに出てくる「今に毎日毎晩で珍しくなくなるんですから、安心ね。」という娘の発言である。また、「恋の初め」という状況と「宿で会った」という出来事との関係である。いずれにしても、解釈の一貫性を担保するため

には、何らかの整合的な脈絡を見出す必要がある。

「会う」という言葉には「男女が深い関係になるという意味もあり、「宿」という空間のイメージと相俟つて、遊女や芸者など、今風に言えば風俗営業のようなものが想起され、お気に入りの娘を見つけてこれから通いつめるという話ではないかとも考えられる。しかし娘は、「毎晩毎晩」と言っているのではなく、「毎日毎晩」と言っているのだから、どうやら女遊びで通いつめるという話ではなさそうだ。それに、「今に毎日毎晩……」とあるのだから、この日かたただちに同棲や結婚生活が始まるというわけでもない。「恋の初め」であるのに、「今に毎日毎晩……」という発言が出てくる不自然さを解消する読み方を探すとすれば、当時の男女関係や婚姻のあり方から考えて、見合いであると考えるのが穏当だろう。

言うまでもなく、現代社会における結婚の形の基本は、「恋愛結婚」である。厚生労働省の調査によると、現在では約90%近くが恋愛結婚で、見合い結婚は10%弱に過ぎない<sup>(1)</sup>。しかも近年は、仲人が取り持つて両人の両親同席の上で行う旧来の見合いはおそらくごくわずかで、営利目的の仲介業者が登録制で会員を募つて行うお見合いパーティー形式のものが増加

していると思われる。かつては新婚夫婦に向けて「お見合い結婚ですか？ 恋愛結婚ですか？」と質問するのがお決まりだったが、それは見合い結婚の割合が恋愛結婚の割合と拮抗していた一九六〇年代から、次第に恋愛結婚が優勢になっていった七〇年代にかけての話である。おそらく恋愛結婚が80%に達した八〇年代半ば

以降、遅くとも九〇年代以降には、新婚夫婦に対してその手の質問をする必要性は薄れてきていたはずだ。もちろん「日向」が発表された一九二三（大正12）年頃は、むしろ見合い結婚が多数派で、恋愛結婚は少数派だったのである。今とは言うまでもない。つまり今とは逆に、いちいち断らなくても見合い結婚だと推測され得る時代だったと考えてよい。しかも近年のお見合いとは違って、当時の見合いは、幼なじみ同士で行われたり、親戚同士で行われたり、見合いをする段階で半ば結婚が既定路線になっているケースも少なくなかった。仲人が縁結びをするような場合も、男性の社会的地位や女性の器量、家柄や年齢などを考慮してふさわしい相手を見つけ、見合いをして問題がなければそのまま婚約して結婚というのが一般的な見合い結婚のイメージだったと考えてよいだろう。しかも「見合い↓恋愛↓婚約↓結婚」などという面倒な手順を踏まない場合も多かったはずである。「恋の初め」なのに「毎日毎晩……」という発言が飛び出すという「矛盾」は、当時の結婚のあり方をふまえ、見合いだったと考えることによつていちおう解消する。見合いであれば、「海辺の宿」が舞台となっているというのも不自然な話ではないだろう。別の言い方をすれば、結婚生活を暗示する「毎日毎晩……」という言葉によつて、「見合いである」という信憑が生じ、そこからさかのぼって「恋の初めであった」とか「海辺の宿で会った。」という表現の解釈が行われるというのが、発表当時の一般的な了解の道筋であったと考えられる。結婚を前提にした見合いの席だからこそ、「娘のために自分を綺麗にしておきたい心

いっぱいの時」という意識を「私」は持っていたのだろうし、自分の器量の良し悪しをきちんと見てもらわなければならぬという意識があったからこそ、「娘は袂を下ろして私の視線を受けようとすると軽い努力の現れた表情」をしたのではないだろうか。

ところが、見合いだと考えたとしても合点がいかない部分が出てくる。それは、「やっぱり顔を見るかね。」という「私」のセリフである。「傍らにいる人の顔をじろじろ見て大抵の者をまいらせてしまふ癖」を持つていることが明記されているから、「私」自身が「ああ、やっぱり見てしまったか……」と考えること自体は不思議ではない。問題は、見合いで初対面のはずの娘が、「やっぱり」という私の言葉を、ごく自然に「ええ」と受け止めていることである。

仮に、見合いの席であると仮定すると、どのような状況で「やっぱり」と「ええ」という対話が成立するのだろうか。

見合いが始まった時には娘の両親も同席していたはずだから、おそらく仲人あたりが座を取り持つてある程度の時間が経過した後、二人だけが部屋に残されたというような状況が想定できる。両親が同席する中、いい雰囲気であ家の対話が進展し、「私たちは、そろそろこのへんで……」というお決まりのセリフで仲人が両親の退席を促すというパターンである。残された二人の間に漂う微妙な緊張感の中で、娘はやがて目の前の男がじっと自分を見つめ続けていることに気づく。見合いの席であるから、念入りに化粧をほどこしている娘は、男の眼差しの中に自分に対する好意的な感情があることを確信する。

「やっぱり、顔を見るかね。」(やっぱり癖が出てしまったか…)「ええ——でも、そんなでもありませんわ。」(やっぱり私のこと、気に入ってもらえただわ)

もちろん「私」の「やっぱり」は、自己内対話として顕在化する意識を反映した言葉だから、娘がそれを受けて「ええ」と発話するのはおかしい。にもかかわらず、顔を見られているという状況の中で、「娘」の側にも別の脈絡で「やっぱり」という言葉に相応する意識が生じ、その意識に寄り添う形で「ええ」という発話が行われていると考えることができるのだ。そのようにして、偶発的な形で成立してしまった対話だからこそ「私」は、「言うことが可笑しかったので…」と娘のセリフを受け止めているのではないだろうか。「——でも、そんなでもありませんわ。」と留保を加えながら発せられる「ええ」には、娘ざかりを迎えている自分の容姿に対する控え目な自負が透けて見えている。

そのように考えると、このあとの「慣れてるんですけど、少し恥ずかしいわ。」というセリフも、器量が自慢の娘が、男たちの眼差しを日常的に浴び続けていることの反映だと言えるのかもしれない。つまり、「やっぱり」の場面で自分の容貌の魅力を意識した娘が、謙虚に口を閉ざさずに、思わず漏らしてしまった一言が、「(近くにいる男性が私に見とれることはときどきありますから)慣れてるんですけど…、少し恥ずかしいわ。」だったと考えられ

なくもないということである。

結末の「娘に親しみが急に加わった気がした。娘と祖父の記憶とを連れて、砂浜の日向へ出てみたくなった。」という語り口から想像できるのは、見合いをした「私」が娘と近い将来に結婚することによって、喪失してしまった家族をあらためて作り出していくことであり、「恋の初めであった。」という冒頭の表現には、夫婦となつてあたたかい家族を作り出した時点から、事後的にこの日の出来事をふり返る「私」の満ち足りた気分がただよってくるようにも思えてくる。

## 二、近代小説のなかの「見合い」

見合いする男女が、海辺の宿の一室で二人きりになつていとう状況を説明するために、「私たちは、そろそろこのへんで…」というお決まりのセリフで娘の両親の退席をうながす仲人の存在を想像したのだが、果たして一九二〇年代の見合いはどのような形で行われていたのだろうか。あるいは、同時代の読者は見合いというものをもどのようなものとして思い描いていたのだろうか。

同時代の見合いがどのように行われていたのかに関する客観的な統計データは見当たらないので、近代小説のなかに描かれている見合いがどのようなものであったのか、具体的な事例を示しつつ検証してみたい<sup>(2)</sup>。

ひとまず言えることは、とにかく想像以上にいろいろなパターン

の見合いがあるということだ。

たとえば見合いをする場所一つをとってみても、「諏訪町河岸の『坊主そば』の二階」(高村光雲「幕末維新懐古談」)、「デパートメントストア」(寺田寅彦「夏」)、「寄席」(徳田秋声「新世帯」)、「千疋屋の二階」(太宰治「きりぎりす」)、「多摩川の河川敷」(坂口安吾「集団見合」)などさまざまである。働いているところを見に行ったり相手の家を訪問したりというパターンもあるし、近所の通りで何度かすれ違っただけという「見合い」もある。かと思えば、「雨が降っても、見合いの場所は地下鉄のなかやさかい、濡れんでも良え。どや、お祖父やんは抜目がないやろ？」(織田作之助「わが町」)などという例もあげられる。つまり、改札口で待ち合わせて、地下鉄の車内で見合いをするというのである。新しいテクノロジーによつて出現した「地下鉄」という空間が一種の「ハレの舞台」として意識されていたとも考えられるが、あるいは諧諷味を出すための文学的虚構なのかもしれない。これだけ多様な見合いのかたちが小説に描かれているのだとすれば、現実に行われていた見合いも一九六〇年代生まれの私が考えるような儀礼的で画一的なものばかりではなかったのだろうと推測できる。少なくとも、小説の中に描かれていた見合いは、決して儀礼的でも画一的でもなかった。

もう少し具体的に見てみよう。

徳田秋声の「新世帯」(一九〇八年)に登場する新吉は、同じ酒屋仲間の和泉屋という男の斡旋でお作という娘と見合いをするこゝとなる。そして、娘の家の近所にある「怪しげな暗い飲食店」で

娘の風評を聞き糺し、家柄や家産についても念入りに調べた後、友人にも相談の上、いよいよ見合いの日を迎えるのだが、二人が会うために選ばれた場所は、驚いたことに「近間の寄席」である。

新吉はその友達と一緒に、和泉屋に連れられて、不断着のままでヒヨヒヨと出かけた。お作は薄ッぺらな小紋縮緬のような白ッぽい羽織のうえに、シヨールを着て、叔父と田舎から出ている兄との真中に、少し顔を斜にして坐っていた。叔父は毛むくじやらのような顔をして、古い二重廻しを着ていた。兄は菱なりのような顔の口の大きい男で、これも綿ネルのシャツなど着て、土くさい様子をしていた。横向きであったので、新吉は女の顔をよく見得なかつた。色の白い、丸ぼちゃだということだけは解つた。お作は人の肩越しに、ちよいちよ新吉の方へ目を忍ばせていたが、新吉は胸がワクワクして、頭脳が酔つたようになっていた。

寄席を出るとき、新吉は出てゆくお作の姿をチラリと見た。お作も振り願つて、正面からの男の立ち姿を二、三度熟視した。お作は小柄の女で、歩く様子などは、坐っているよりもいくらかいいように思われた。

寄席という場を借りて、互いの「顔」や「姿」を視認し合い、文字通りの「お見合い」を行っている様子が活写されている。仲人は同席しているが、当事者同士が言葉を交わすことはなく、対面して挨拶するわけでもなさそうだ。酒屋仲間の若い友人が二人を引き

合わせているところや、「不断着」の新吉やお作に付き添っている親族の身なりなどを見ても、両家の両親同席のもので互いに正装をして対面して対話を交わすという格式張った見合いとは程遠いものであることがわかる。翌日には和泉屋が新吉の店にやってきて「先方じゃもうすっかり気に入っちゃって、何が何でも一緒にしたいというんです」と言うので、「じゃ貰おうかね」という話になり、ふたたび会うこともなく、一週間後には祝言をあげることになる。

しかも、隣り合つて座った挙式の最中も、互いに見つめ合つたり、言葉を交わしたりもしていないと見えて、挙式の翌日、「朝飯の時、初めてお作の顔を熟視することができた」と書いてあるのだ。見合いから結婚に至るプロセスに厳格さはまったく感じられず、柔軟かつ奔放に行われていた様子がかがえる。

「大隈綾子刀自の思い出」(一九二一年)には、高村光雲の師匠であった東雲が、徳川家の大工の棟梁をしていた柏木家と旧旗本家の三枝家から頼まれて、縁談をまとめることになるいきさつが書きとめられている。

さて、見合いということになりましたが、当時世の中もまだ十分に静謐になったというのではなく明治新政の手の付け初めで、何となく騒々しい時で、前から多少とも物持ちの家でも財産を減らさぬようにと心掛け、万事控え目にした時でありますから、この見合いのことなども双方ともに極質素に致すがよろしかろうということで、師匠の宅の坐敷で、双方が落ち合う

ようにしたらというのであったが、師匠は、どうも、自分宅といつても坐敷というほどの坐敷もなし、柏木家と三枝家との歴史した両方の関係者をお招きするだけのことは出来ませんから、何処か、極儉約で、人目に立たない好い場所を考えましようといつて、思い附いたのが諏訪町河岸の「坊主そば」の二階であった。

「極儉約で、人目に立たない好い場所」という条件で探したと言え、元旗本家の令嬢が見合いをする場所として蕎麦屋の二階が選ばれるというのは驚きである。その一方で、見合いするには、「柏木家と三枝家の歴とした両方の関係者をお招きするだけ」の「坐敷というほどの坐敷」が必要であると考えられていたという点も見逃せない。男女を娶せるという目的のために融通無碍に執り行われるという側面を持ちながら、それなりの厳格さや格式が必要であると考えられていたということも確かなのである。

時代は下つて、「日向」よりも二十年近く後の時代の小説だが、佐藤垢石の「縁談」(一九四一年)を見てみよう。縁談をめぐるトタバタが面白可笑しく描かれていて、時代状況との兼ね合いもあるかもしれないが、形式にこだわらない行き当たりばつたりな見合いのありようがかがえて興味深い。

見合いの場所は両国駅の入口、時間は午前十一時。森山兄弟の方が先に駅の入口のところに揃つて待っているから、こちら

は山岡を連れて揃って行く。そこから四人打ち揃って、どこかへ昼餐を食べに行こうという手筈になったのである。

外房で釣りをする時に厄介になっている森山という男に頼まれて、「私」が婚期を逸してしまっている森山の妹の縁談をまとめようと奔走する話である。引用文中に「森山兄弟」とあるのは、正確には「森山兄妹」で、森山に頼まれた「私」が、男やもめで寂しく暮らしている友人の山岡を森山の妹に引き合わせる場面だ。この日にいたるまでに、互いの写真のやりとりがあったり、戸籍謄本の交換があったりして、それ相応の手順を踏んではいるのだが、実際の見合いのありようを見る限り、まるで友人同士が待ち合わせて遊びに出掛けるのと変わらない感じである。

さらに時代は下って敗戦後の小説になってしまいが、坂口安吾の「出家物語（一九四八年）あたりになると、混乱の時代に書かれた「無頼派」の小説にふさわしく、見合いとは名ばかりのデタラメぶりである。

戦災で妻子を亡くした五十歳の甥のために、煙草雑貨屋を営んでいる叔母が見合いをすすめた相手は、三十五歳の戦争未亡人だった。見合いは、甥の幸吉の家を断髪洋装美人のキヨ子が来訪する形で行われるのだが、二言三言ことばを交わすと、いきなり次のような仕儀にいたる。

幸吉は身の内が熱くなり、一膝のりだして、どうですか、泊っ

て行きませんか、と言うと、え、でも、泊るわけに行かないわ、うちに子供も待つてるし、見合いにきただけなんですもの、体裁が悪いでしょう、と言う。

幸吉も安心して、じゃア、まア、ひとねむり、つもる話だけ致しましょう、ということになって、めでたく契りをむすんだ。

未亡人であるということもあるのだろうが、いきなり女が男の家を訪れて二人きりで会い、ただちに契りを結んでしまうのが「見合い」だというのだから驚く。

他にも、大宰治の「きりぎりす」（一九四〇年）のように「千疋屋の二階」で男が母娘と会うという総勢三名の見合いもある。こうして小説のなかに描かれた見合いを見ていくと、双方の両親と仲人が同席して行われるフォーマルな感じの見合いというのは、案外少なかったのかもしれないと思えてくる。

もちろん、仲人が「そろそろこのへんで……」とうながして、二人きりで文字通りの「見合い」をさせるといふ段取りがあったことをうかがわせる事例をあげられることもできる。小説ではなく戯曲の一節ではあるが、天折の劇作家森本薫の代表作『女の一生』（一九四五年・全五幕）の「第三幕 大正四年夏の夜」の一場面を見てみよう。

（ふみ）まあ。お見合に来て将棋をさしているなんてどういふの。

〔総子〕だって、将棋をしましょうなんていい出したのは精三さ

んなのよ。

「ふみ」呆れた。あの人は、そういう人なのよ。時と所つていう考えがまるでないですからね。第一お見合の席なんてものは挨拶さえすめば当人同士放つといて、みんな引込んじまえばいいものよ。姉さんが傍にいてくれなんていうものだから、いい気になつて腰をすえてるんじゃないの。半分は姉さんがいけないのよ。

「総子」だつて……二人つきりにされちゃ私困るじゃないの。何を話していいんだかわからないし。

「第一お見合の席なんてものは挨拶さえすめば当人同士放つておいて……」というあたりに、当時の通念の反映がある。その一方で、猪瀬という男性が見合い相手の総子の家にやってきているにもかかわらず、知人が遊びに来たような気楽さで妹の夫の精三の誘いの乗つて将棋を指して帰つてしまつたというあたりには、形式張つたところのない見合いの実情もうかがえる。

このように見合いというものの形態が奔放と言えるほどの多様性を持つていたということを考えると、両親を亡くした「私」が、海辺の宿で娘と二人きりになっているという状況を「見合い」であると解釈することは決して不自然ではないのである。

### 三、「日向」のモデル問題

森晴雄は、その「日向」論<sup>(3)</sup>の中で、「恋の初めであつた」という

冒頭部と「慣れてるんですけど……」今に毎日毎晩で珍しくなくなるんですから……」という後半の娘の発言の結びつきについて、「長い間疑問に思つていた」と述べ、子細に検討を加えている。たしかに「恋の初め」という言葉は、「恋の初めの時期(娘との)」と考へても、「初めての恋(女性との)」と考へても、腑に落ちないところが残る。「慣れてる」と書いてある以上、二人は何度も会つてはいるはずであるし、初恋だとすると二十四歳では遅すぎると考へられるからだ。そして、「恋の初め」をどう理解すべきかという問題について、以下のように記している。

「私の顔なんか、今に毎日毎晩で珍しくなくなる」とは、結婚を前提として、二人が間もなく一緒に住むことを遠回しに伝えた言葉である。だから、「恋の初め」とは今までしばしば会つてはいたが、海辺の宿でこの時初めてお互いに相手への愛の確認をしたということであろう。「恋の初め」という強い言切りは、二人の「本当の」「真の」恋が始まつた時(結婚を約束して)ということになる。別の箇所では娘のために自分を綺麗にして置きたい心「ばいの時」という表現もある。それまでとは違つた娘との関係が始まろうとする、歓びや期待に満ちた強い心の表れである。

このあと「日向」の小説表現を三つの節に分けて詳細に検討していく、「二十四歳の『私』の、娘との恋と自己嫌悪(悪い癖)の解消

によつて、新しい生活への期待と喜びを描いた作品」であると結論づけている。つまり、両親も祖父(母)も亡くして家族を喪失し、孤児となつてしまった「私」の、新しい「家族」を手に入れることができるという喜びの予感が、「日向」というタイトルに象徴されているということになる。

そして、いったんこのような読みを提示した上で、川端康成自身の発言を取り上げつつ、作家の問題を持ち出している。川端自身が「日向」について「海辺の宿は実は岐阜の長良川岸の宿である。しかし事実の通りではない」と書いていることを紹介した上で、婚約者であった伊藤初代のことを描いた一連の作品の一つであると指摘しているのだ。森晴雄によれば、初代との関係を素材にした掌の小説が全部で十一編あり、「日向」はそれらの作品群の中で「体験を客観的に捉え、成功した初めての試み」であるという。

川端康成は、本郷のカフェ「エラン」で女給をしていた十四歳の伊藤初代を見初め、足繁く通うようになった。ところがカフェの女主人が結婚して台湾に行くことになり、「エラン」は閉店を余儀なくされる。初代は女主人の世話で岐阜の寺に預けられることになり、姿を消してしまう。そこで、初代に心ひかれていた川端は、同じ東京帝国大学に通っていた友人の三明永無をもなつて十六歳になつていた初代を岐阜に訪ね、長良川岸の宿「みなと館」(現・ホテルパーク)で会つて求婚するのだ。求婚に対する返事が、父親の承諾を条件にしていたため、川端康成はさっそく初代の父忠吉が用務員をしている岩手県の小学校に東大の友人三名を引き連れ

ておもむき、承諾を得て見事に婚約成立の運びとなる。「日向」は、そのようにして一九二一(大正10)年の秋に川端康成が初代の養家がある岐阜を訪れたときの体験をもとにしている。孤児であつた川端と同じように、初代も母を亡くして父のもとを離れ、子守奉公などをしながら暮らした薄幸の少女だつた。

友人をともなつて岐阜におもむき、初代が住んでいた寺ではなく、宿で昼食をとりながら求婚したという形式は、一種の見合いであると言えるだろう。前述の「新世帯」では新吉が寄席で見合いをするときに同業者の酒屋と相談相手の友人が同席したことになる。大宰治の「服装に就いて」(一九四一年)には高価な絹ものを「友人の見合いに立ち合った時」に着たという話が出て来る。父を亡くし、家長の長兄から勘当されていた太宰治の場合、川端康成と似たような境遇だつたわけだ。友人の紹介で恋愛が始まるという形式の出会いが「見合い」と認識されていたことは注目される。同じく太宰治の「きりぎりす」(一九四〇年)では、母と娘が男と千疋屋の二階で会うという見合いが描かれている。娘には家長である父親がいるはずなのだが、同席してはいない。しかも娘は、「とにかく見合いだけでも」とすすめられたときに、「私にとつては、見合いもお祝言も同じもの様な気がしていましたから、かゝると返事は出来ませんでした」と言つていて、それ相応の覚悟でのぞんだ見合いであつたことがうかがえる。

祖父母も両親を亡くしている川端康成のような青年が見合いをするとすれば、仲人や両親がそろつた大げさな形式を取ること

は考えにくかったのかもしれない。

川端康成と伊藤初代のことを念頭において、あらためて「日向」の小説表現をたどってみると、解釈を助ける文脈が立ち上がってくることがわかる。たとえば「慣れてるんですけど、少し恥ずかしいわ」というセリフは、カフェで女給として働いていたという初代の過去と、そういう初代と会うために川端康成が足繁く「エラン」に通っていたということを前提にすれば、ごく自然なセリフである。見合いなのに「海辺の宿」が舞台になっていて、しかも両親や仲人の姿が描かれていないのも、そもそも孤児である「私」が母を亡くして父とは離れて暮らしている娘を訪ねて求婚しているのだから当然のことだ。「介添人」としていつしよに昼食をとった友人の三明永無も、いつまでも席を外さずに同席するほど野暮ではなかったということだろう。

それでもやはり不自然に感じられるのは、この日の出来事全体を「恋の初めであった。」と概括している冒頭の一文である。海辺で会う前に足繁くカフェに通っていたのだとすれば、すでに「恋」は始まっていたことになる。しかも冒頭の一文が、娘との恋が成就してから事後的な意味づけをしている叙述であるように読めるのに対して、実際には婚約の一ヶ月後に初代から婚約破棄の手紙が来て二人は結ばれることなく別れているのだ。長良川岸の旅館で会ったのに「海辺の宿で会った。」としていることを含め、川端康成自身も言っているように「事実の通りではない」ところがあるようなのである。別の小説の中では、「彼女の顔が珍しくなくなるといふ少女の

言葉だけはつくりごとであります」（「父母への手紙」一九三二年）と書いているが、「つくりごと」はそれだけにとどまらないと考えた方がよい。だとすれば、実際の体験を下敷きにしながら、海辺の宿で見合いをした男女が結ばれるという虚構をしつらえて「日向」を成立させたと考えるのが妥当だろう。言い換えれば、実体験と虚構のあいだに孕まれている微妙なずれが、表現の微細な部分に曖昧で不分明なところを作りだし、読み手を解釈に誘う含蓄のある表現を生み出している、ということである。

初代を失った川端康成は、虚構空間の中に「恋の成就」という現在を仮構するために、川沿いの旅館で行われた知りあい同士の見合いを「海辺の宿」で行われた初対面の男女の見合いに作りかえたのではあるまいか。しかも、娘と祖父の記憶とを連れて日向へ出て行くこうとするという結びの場面には、初代と結婚して子どもを作り、失ってしまった家族を再構築していきけるという喜びの予感に満たされたあり得べき現在が仮構されている。だからこそ、《川↓流れる》という空間ではなく、《海↓生む》という空間が選ばれたのだ、とまで言ってしまうのは、恣意的な解釈に過ぎるだろうか。

初出で結びの一文が「娘と祖父の記憶を連れて、砂浜の日向へ出てみたくなった。」となっていたのも、伊藤初代を失った現実の川端康成の思いが無意識のうちに投影されてしまっていたということなのかもしれない。なぜなら、初出のように結んだ場合、「娘」と「祖父の記憶」と読めるだけでなく、「娘の記憶」と「祖父の記憶」という解釈も成り立ち、娘も祖父も共に喪失したという含意が生

まれてしまうからだ。それが、川端康成自身の手によって後に「と」を補い、「娘と祖父の記憶を」から「娘と祖父の記憶とを」へと書き改められ、「娘」と「祖父の記憶」であるということが明確になった。つまり、「娘と祖父の記憶とを」という形にしたことで、見合いによって伊藤初代との恋を成就させている「私」をフィクション世界の中に仮構していくという川端康成の志向が、より明確になったと言えるのである。

#### 註

- (1) 厚生労働省の「女性と男性に関する統計データベース」調査年次別に見た見合い結婚と恋愛結婚の構成〔1930-2005〕による。同報告によると、一九三〇―三九年においては、見合い結婚69・0%、恋愛結婚13・4%、不詳17・7%であるのに対し、二〇〇〇―〇五年においては、見合い結婚7・1%、恋愛結婚87・2%、不詳6・3%となっている。なお、同報告は国立女性教育会館女性教育情報センターの「女性情報ポータル Winet」から入手できる。<http://winet.nwec.jp/navi/>
- (2) 調査にあたっては、青空文庫収蔵テキスト(二〇一〇年十月末現在、九五三九作品)の中から、「見合い」を検索語として対象作品を選び出し、分析を行った。<http://www.aozora.gr.jp/>
- (3) 森晴雄『川端康成「掌の小説」論―「日向」その他』(竜書房、二〇〇七年十二月)。

(のなか・じゅん)

### 『現代文学史研究』第十五集合評会のお知らせ

○日時 二〇一一年(平成23)一月九日(日)

午後四時より

○場所 割烹はぎわら

○交通 地下鉄都営三田線「新板橋」駅、

またはJR埼京線「板橋」駅より徒歩三分。

○会費 六千円

※「現代文学史研究新人賞」授賞式と新年会を兼ねて行います。

#### 【問い合わせ先】

現代文学史研究所事務局

〒215-0027 川崎市麻生区岡上二二五―四

e-mail:gendaihungakushin@yahoo.co.jp

電話〇四四―九八六―三七六〇(事務局長・野中)